

Λ前半部の展開

ムン キョンナミ
文 景楠

『形而上学』Λ巻（以下Λ）¹の前半部は、あまり心躍る読み物ではない。感覚的对象を主に扱うその内容は、一読する限りでは『自然学』や『形而上学』の他の諸巻の劣化したまとめのようであり、第一の動者を主軸に神学としての位置づけを重視する伝統的なΛ解釈からすれば、せいぜいのところ前置きの考察、または無用な付け足しにすら見えてしまう。

こういった思わしくない評判のうち、議論の質に関する懸念はともかく、Λの前半部を前置きや付け足しとする見解のほうは、この著作を扱う研究の進展によって過去のものになりつつある²。争われてきた論点は数多いが、ここでは近年の傾向として大まかに次のものを受け入れたい。(1) Λは、『形而上学』の他の諸巻とつながる有機的な部分というよりも、(内容的には関連するが) 出自を異にする自足的な著作の素案と考えるべきである³。(2) その内容は導入となるΛ1を除き前半部(Λ2-5)と後半部(Λ6-10)に分かれるが⁴、後半部の神学的内容はもちろん、前半部の自然学的内容もΛ全体の目的の完成に寄与している。(3) Λ全体の目的は狭義の神学ではなく、実体論・原理論⁵・存在論といったものをその核心とする、「智慧」や「第一哲学」などと呼ばれるべき何かである。

(1)と(2)はいわば読解の出発点となる前提であり、このような傾向が全体としてΛ前半部の再評価と密接に結びついていることは明らかである。ただし、再評価されたΛ前半部の役割は、(3)におけるΛ全体の目的を「実体論・原理論・存在論」のどれに置き、その詳細をいかに調整するかと連動して大きく揺れ動く。そして、どのような立場を展開する際にも、極めて圧縮されたΛの晦渋な言葉遣いや、無数にある議論の隙間が立ちほだ

¹ アリストテレスの他の著作を引用する際には一般的な略号とベッカー版の頁番号及び行数を用いるが、*Metaph.*の各巻と章は単にΓ1やΘ2などと略す。なお、本稿における日本語訳は全て私訳であり、亀甲括弧は訳者による補いを表す。

² 2000年以降の主な注釈書や論文集には Frede and Charles 2000; Fazzo 2014; Horn 2016; Baghdassarian 2019; Judson 2019; (Λだけを扱うものではないが) Menn, Forthcoming などが、新たな校訂には Fazzo 2012 と Alexandru 2014 がある (Γκολίτσης 2021 もテキストを含むが未見)。なお、本稿では *Metaph.*を巡る文献学的研究の動向には言及しないが、この主題を論じた日本語の論文に中畑 2020 がある。

³ Frede 2000a, 1-4; Burnyeat 2001, 132; Judson 2018, 2019 など。なお、Λを *Metaph.*全体の完成と見なす Menn (Forthcoming, Ia5, 6-7) はこの点に反対する (Judson 2018, 266-70 も参照)。

⁴ Lang (1993) はΛ後半部からさらにΛ9以降を、Baghdassarian (2019, 14) はΛ10の後半部を切り離して考えるが、本稿では論じない。Λ全体に対する分け方としては、Berti 2016, 84-5 も参照。

⁵ 本稿では、「原理」と「原因」を(少なくとも外延的に)置換可能な仕方で用いる (Λ4, 1070b25-7)。

かる⁶。

本稿の目標は、 Λ 全体の読解という大きな課題に向けた準備作業の一部を行うことである。具体的には、まず (I) Λ の全体像を描こうとする近年の諸解釈をまとめたうえで、(II) それらが抱える共通の難点を確認し、 $\Lambda 1$ の冒頭を重視する傾向に一定の留保を付ける。続いて、(III) 私が最終的に目指したい Λ の全体像（モデルの段階的修正を通した四原因論の展開）の筋書きを先に提示してから、(IV・V) 試験的に $\Lambda 3$ を注釈することで、この筋書きがどのような解明を与えうるかを示す。最後に、(VI) 本稿の議論をまとめながら今後の展望を述べる。

I. Λ の全体像を描く

狭義の神学ではない仕方で Λ 全体を理解し、その全体像に貢献する役割を Λ 前半部に与える際の出発点は、 $\Lambda 1$ 、その中でも冒頭に置かれた次の二つの文である。「この探究は実体に関するものである。というのも、諸実体の原理と原因が探究されているのだから」（1069a18-9）。

これらの文に見られる言葉を様々な仕方で足がかりにしながら、先行研究では次のような解釈が提示されてきた。まず Lang (1993) は、 Λ 全体を「様々な実体の網羅的探究」と見なし、 Λ 前半部で感覚的実体が論じられるのは、それが実体の一種であることからして当然だと主張する。続いて Frede (2000a, 5-6) は、 Λ 全体を「感覚的実体の原理の探究」と捉え、前半部はまさにそのように理解される原理を、後半部は、それ自体が実体であると同時に感覚的実体の原理にもなっている不動の実体を扱うものと考え。未出版だが広く読まれている Menn (Forthcoming, Ia5, 6-7; III β 1, 21-2, 38) は、 Λ 全体は (*Metaph.*全体の最終課題となる)「離在する単一の実体である最高の原因を求める探究」であり、この作業は前半部では（いくつかの候補が検討されるものの）失敗するが、それを踏まえた後半部では第一の動者の探究として果たされると解釈する⁷——これらを俯瞰して分かるように、多くの論者が $\Lambda 1$ 冒頭に登場する「実体」や「原理」といった言葉を重視しており、それに応じて Λ 前半部はその存在感を増している。 Λ 前半部はその評価において、 Λ 全体の目的を実質的に規定する要として、いわば「醜いアヒルの子」のように生まれ変わった

⁶ Barnes (1995, 108n34) が「 Λ の殆どは恥ずかしいほど酷い」と（一応は仮定として）書いているのに対して、Burnyeat (2001, 149) が「 $[\Lambda]$ 彼の知恵はようやく完成した」と（こちらは一応ミュートスとして）対照的に述べているのは印象深い。なお、 Λ の執筆時期については、結論を下すことは不可能であり、有意義でもないとする意見が出されている (Baghdassarian 2019, 42-7; Judson 2019, 4-7)。

⁷ ここまでの選別と続く段落の批判は、Judson (2018, 238-43; 2019, 10-5) に基づく。なお、 $\Lambda 1$ 冒頭を素直に取り、 Λ 全体を単純に「実体の原理の探究」と見なすことは難しい。 $\Lambda 4-5$ では「存在するもの全て」の原理が探究されており、 Λ 後半部では「不動の実体の原理」が論じられていない (Frede 2000a, 6)。

ことになる。

近年最も包括的な Λ 解釈を提示した Judson (2018, 2019) は、 Λ 前半部を重視する大きな流れ自体は肯定しながらも、 $\Lambda 1$ の言葉遣いや Λ の全体的な展開が、上で挙げた先行研究の細部を支持しないと批判する。例えば、Lang による実体の重視はもちろん間違いではないが、それだけではなぜ Λ がこれほど異なる二つの部分からなるのかという問いに答えられないし、 $\Lambda 4-5$ で(実体だけでなく)「全てのもの」の原理が求められていることも説明できないと Judson は考える。Frede に対しては、 Λ は実体の原理の区別よりも、実体の種類の区別に依拠して構成されているし、Frede の提案はアリストテレスが実体を基本的に(感覚的なそれに限られない)広い意味で使っていることとも整合しないと批判する。最後の Menn の解釈に関しては、 $\Lambda 1$ でのアリストテレスの言葉遣いに「最高の原因」は見られず、 Λ 前半部の議論も失敗に終わる否定的なものとして理解するのは不自然だとする反論を述べる⁸。

Judson の代案は、 Λ 全体を上記の先行研究の場合よりも広い「存在するもの全ての原理の探究」として理解し、実体の原理の探究にその出発点となる位置を与えることである(2018, 255–66; 2019, 15–21)。これらの原理はその前半部において形相と質料、始動因としてほぼ解明されるが、それでも不動の実体を扱う後半部が必要となるのは、それらの原理をアナロジーの下で用いながら、 Λ 全体の目的にとって必要だが前半部では部分的にのみ論じられていた「現実態の優先性」の議論を完成させるためだとされる。結果的に Judson は、 Λ 前半部と後半部の関係を Γ と E でそれぞれ述べられた第一哲学の関係、つまり一般形而上学と特殊形而上学の関係に準える。「存在するもの全ての原理」の枠組みは Λ 前半部で一般形而上学の主題としてほぼ解明されるが、後半部の特殊形而上学はそれに重要な論点を付け加える役割をもつのである。

II. 冒頭の価値

Judson の批判と代案を評価する際にまず確認すべきは、 Λ 全体を「存在するもの全ての原理の探究」として理解する彼の立場が、 $\Lambda 1$ の冒頭と整合するかである。そこで明記されているのは「実体の原理」に関する探究であり、実体は「存在するもの全て」の一部に過ぎないからである。だからこそ、以前の研究はどれも実体を前面に出してそれぞれの解釈を組み立てていたのであり、この点に関する応答なしに Λ の主題を再設定することはできない。

これと関連する Judson の見解は、 $\Lambda 1$ の冒頭に彼が付した注釈に見られる (2019, 49–

⁸ Judson は他にも Λ 前半部を後半部の単なる前置きの考察として見る立場を検討するが、それらも今まで見てきたものと類似した難点を抱えていると判定する (2018, 270–2; 2019, 15)。

50; 7-8 及び 2018, 235-6 も参照)。そこで彼は、冒頭の二つの文の関係や⁹、 Λ 4-5 が実体だけでなく「存在するもの全て」の原理を扱っていることを説明するためとして、 Λ 1, 1069a18-20 を次のように補いながらパラフレーズする旨をはっきりと述べている¹⁰。

この探究は実体に関するものであるが、それは、この探究が実体の原理と原因に関わるからである。この探究がそれらに関わるのはなぜかといえば、①我々が全てのものの原理と原因を探究しており、②それらを探究する方法は第一の存在物の原理と原因を探究することであり、 実体こそが第一の存在物だからである。

(Judson 2019, 50; 山括弧は Judson によるものだが、下線と丸文字は私の追加)

主たる補いは山括弧の箇所だが、その後半部②に書かれている内容については、実体を（「全てのもの」における）第一の存在物だとする続く文の記述からも明らかであるように、反対すべきところはない。しかし、②が内容的に整合するということから、全てのものの原理を探究することを Λ におけるアリストテレスの主題と見なす①まで正当化できるかは定かでない。そもそも、原文の「諸実体の原理と原因が探究されている」は探究の主体が明記されていない受動態であり、補い方もこれが唯一とはいいがたいからである¹¹。先行研究の論者たちは、Judson のように補うことが許されるのなら、自分たちにも当然それぞれの解釈に有利なようにテキストを補完しながら読むことが認められるはずだ、と主張しうる。

Λ 前半部を無視する過ちからは脱したが、 Λ 1 冒頭を様々な仕方で読み直してみても常に不自然さが残る——このアポリアから抜け出すために私が考えたいのは、冒頭がもつ価値の不安定さである。アリストテレスが一つのまとまりをなす文章群の冒頭でその主題を示すとき、そこには「べき」などに当たる表現が使われることが多い。しかしこれは法則のようなものではなく、『カテゴリー論』を皮切りに、いくつも例外が見られる。 Λ 1 冒頭の位置づけを考える際に参考になるものとして、例えば（明らかに未完成だが） α は次のように始まる。「真理に関する探究は、ある意味では困難だが別の意味では容易である」（ α 1, 993a30-1）。 Λ 1 と同じく「探究」に関する言及から始まるこの記述の中心は、「真理」である。真理はもちろん α の主題と関連しているが、それを表現する言葉として必要十分

⁹ Judson は、続く引用のように内容を補わない場合、第一文と第二文をつなぐ“ $\gamma\acute{\alpha}\rho$ ”がほぼ無意味になると考えている (Berti 2016, 69; Baghdassarian 2019, 84-5 も参照)。

¹⁰ Judson が明記している通り、この補いは Frede 2000b, 54-61 の議論に依拠している。

¹¹ Judson の補いの根拠となる Frede 2000b, 54-61 の議論は、 Λ 1 の第一文における「この探究」が誰の探究なのか、そして第二文の「諸実体の原理と原因が探究されている」の動作主が誰なのかに対して、様々な解釈の余地があることを示している。注目すべきことに、Frede 自身は Λ 1 冒頭を Judson のように補いながらも、結果的に Λ 全体でアリストテレスが目的とするのは感覚的実体の原理と原因の探究だとしている (2000a, 6-7)。なお、②に関しては、 Λ 1 冒頭の解釈としてではないが、Lang (1993, 261-2) もまた実体の原理の探究が存在するもの全ての原理の探究につながることを見逃してはいない。

な仕方では適しているわけではない。例えば a_2 で探究されるのは、真理と関連しているが外延が完全に一致するわけではない「原因」や「原理」だからである¹²。こういった事例は、ある文章群の冒頭にその主題が「べき」などの表現で示されていない場合、そこに見られる言葉が主題を設定する際にもつ重要性を柔軟に査定する必要があることを示している。

この錯綜した迷路を前に、私は現時点における自分の立場を次のように捉えておきたい。私自身は、 Λ 全体の主題を「存在するもの全ての原理」として考える Judson の方向性を（その詳細は大幅に変更したうえで）同じく追究してみたい。ただし、それには二つほど留保を付ける必要がある。

第一に、 $\Lambda 1$ の冒頭がそのような解釈を支持するという見解にはさほど力がないと思われる。Judson 本人もある程度恣意的な補いに頼っている以上、 Λ 全体の主題は結局 Λ 全体に目配りすることでしか正当化できないだろうし、結果的に、Judson 以前の先行研究も（少なくとも $\Lambda 1$ に基づく批判に対しては）未だに有効な選択肢として残されることになる¹³。

第二に、その冒頭が結局のところ何らかの補いなしには理解困難な形でしか残されていないという事実は、 Λ が「統一的な計画と構造が備わった単一の企画」（2019, 7）であるとする Judson の見立てに対しても、より慎重であることを要求する。企画（の素案）としての Λ の計画と構造の完成度は、「結論とそれを支える議論が決まっており、後はきちんと文章化すればよいだけの状態」よりも、（少なくともその一部においては）「一応の主題と流れを決め、試案的に材料を集めてみた状態」に近いのかもしれない。 Λ は、前半部であれ後半部であれ、その多くが別の文脈で書かれた様々な文章を材料とする（推敲の度合いも不均一な）つぎはぎであり¹⁴——全体像を示すような冒頭としてアリストテレス本人が $\Lambda 1$ を用意していたか、 Λ 全体の結論を見通せるところまで彼自身の構想が進んでいたかを含め——その完成度を断定することはできない。

¹² Berti (2016) は、この点などを基に Λ と a が内容において実際に関連すると考える（ただし Judson 2018, 271–2 も参照）。

¹³ Λ 後半部の解釈に関しても、先行研究に対する Judson の提案の優位には再考の余地がある。 Λ 後半部には現実態の優先性と関連しない内容が多々含まれているからである。 $\Lambda 7-9$ について、少なくともその一部は（関連が皆無ではないが）「残余」であると Judson 自身が述べている（2019, 19）。

¹⁴ 前半部が様々な箇所のもまとめであることは度々指摘されているが、後半部に関しても、 $\Lambda 8$ に hiatus を避ける明らかに調子の異なる箇所があるといった理由から（Blass 1875）、何らかの編集の跡を多くの論者が認めている。ただし、その編集作業の詳細を決定する術はない（Judson 2019, 239–40）。

Ⅲ. モデルの段階的修正を通じた四原因論の展開

一応の主題を念頭に置いているが未だに編集の途上にあるテキストとして Λ を理解する方針をいったん受け入れれば、 Λ 全体の構造に関して、他の解釈を完全に論駁する決定的なものを提示することは難しくなる。ここでは、この点を了承したうえで自分が今後追及したい筋書きを粗描しておく¹⁵。

1. Λ の主題は、「存在するもの全ての原理の探究」である。

[a] その原理とは、四原因（形相・質料・始動因・目的因）のことである。

[b] Λ 1 冒頭では Λ 全体の主題と関連する重要な概念が言及されるが、主題そのものの厳密な記述がそこでなされているわけではない。

2. Λ が 1 の主題を展開する仕方は、(*Phys. II 3* のような体系的概観ではなく) モデルの段階的修正である。つまり Λ は、最初に暫定的なモデルを提示し、それを検討し補完しながら、新しい原因と以前のものとの関係を整理する作業を行うことで、段々とそのモデルを育てている。

[a] Λ 2 は、感覚的実体を中心的な例とする「質料と形相（と欠如態）」というモデルを出発点として提示する。

[b] Λ 3 は、このモデルに対して始動因を追加し、その位置づけを明瞭化する。

[c] Λ 4-5 では、 Λ 3 までに整備されたモデルにさらなる疑問を提起することで、感覚的な事柄を基に探究できる「原因の異同」を、最大限に広い仕方で規定する。

[d] Λ 後半部は、 Λ 5 までに整備されたモデルに不足している点を指摘しながら、不動の実体へと場面を移して目的因を導入し、それと他の原因（主に始動因）との関係を明らかにすることを目指す。

[e] ただし、これらの議論を組み立てる際にアリストテレスは別のところで書いた様々な材料を自由に切り貼りしている。未だ編集過程にあるという性質上、その展開には不自然または不十分な点が多々残る¹⁶。

この筋書きの 1-a と関連して私が殆どの先行研究よりも重視するのは、 Λ 前半部における目的因の奇妙な欠落である。目的因を除けば、 Λ 前半部の道具立ては異様なほど多彩である。カテゴリー、現実態と可能態、アナロジー、自然、一、存在、自体的と付带的、優

¹⁵ 下記の筋書きと関連して、Crubellier (2000, 157) や Berti (2016, 84-5) が Λ を原因論の展開と関連付ける記述をすでに行っている。しかし、前者は必ずしも Λ 全体の主題を視野に入れずに目的因のみを主な対象にしているし、後者は Λ を実体の原理に関する初期の探究と見なす想定に基づいており、詳細において私の筋書きと異なる。

¹⁶ 例えば Λ 後半部は、その全体が最初から目的因を語るために書かれたわけではないと考える。

先性や離在性といった典型的なアリストテレスの枠組みに加えて、プラトンや初期ギリシア哲学者に関する言及も随所で行われる。このように豊富な（全体の分量からすれば、豊富すぎる）概念群の中で、原因論として必須であると思われる目的因に関する言及が徹底的に排除されているのは奇異に映る¹⁷。この点に関して、私は Judson とは異なり、目的因に言及しない Λ 前半部では、原因論は（枠組みとしてすら）完成しないと考える。

この欠落を意図的なものと見なし、 Λ 後半部で求めるために目的因をあえて残しておいたと論じていくためには、少なくとも次の深刻な疑問に先に答えておく必要がある。なぜ Λ は、扱い慣れた感覚的実体ではなく、極めて深淵な不動の実体を対象に目的因を論じるのだろうか。これについては、Crubellier (2000, 157) が指摘しているように (Frede 2000a, 18 も参照)、目的因が最も難解な原因であり、先人でこれを適切に把握した者はいないとアリストテレスが述べていたことを踏まえる必要がある (A7, 988b6–16)。ここから可能性として出てくるのは、最も難解な原因である目的因を確かな基盤の上に置くためには、その原因の存在が疑われてきた感覚的実体ではなく (*Phys.* II 8–9)、同様に難解だがそれを論じるための適所となる不動の実体へと舞台を移して議論する必要があった——それが成功しているかはともかく——という方向性である。

IV. 始動因を導入する：モデルの補完

こういった筋書きの妥当性は、もちろん Λ 全体を読み込むことで検証される必要がある。ここでは、2-a 及び b と関連して、「漠然とつながった諸テーゼのリスト」(Crubellier 2016, 119) に見えてしまう $\Lambda 3$ という限られたテキストを中心に、上の見通しを基に一定の解明を与えてみたい。私は $\Lambda 3$ を 1069b35–1070a4 と 1070a4–30 の二部に分け、前者を $\Lambda 2$ のモデルの補完となる「始動因の導入作業」として、後者を新しいモデルの明瞭化となる「始動因の位置づけ作業」（その主な課題は形相及び結合体との関係の解明）として理解したい。まずは $\Lambda 2$ とのつながりから見ていこう¹⁸。

¹⁷ 他の注釈者たちも当然この欠落に言及している (Crubellier 2000, 157; 2016, 133; Frede 2000a, 17–8; Baghdassarian 2019, 133–4; Judson 2019, 154–5)。彼らの多くは、不自然さを緩和するために形相と目的因の同一性に言及するが、この同一性の中身に関しては論争がある (文 2022)。私は、それを内包における厳密な同一性として理解することは端的な間違いであり (アリストテレスが多くの箇所両者を別のものとして持ち出すことが不可解になる)、それを外延的な同一性として捉えたうえでどちらか一方だけに言及すればよいとすることは「理論的探究」として不適切だと考える。

¹⁸ $\Lambda 3$ に何とか秩序を与えようと試みる先行研究はすでいくつかあるが、それらは $\Lambda 3$ をまとめる主題を形相に求めることが多い (Baghdassarian 2019, 131; Judson 2019, 102–5; Menn, Forthcoming, III β 1, 25)。例えば Judson は、形相の優先性を論じる章として $\Lambda 3$ を捉える。私の解釈でも形相は重要だが、それは形相が主題だからではなく、始動因の内実を解明する際にそれが中心的な参照軸となるからである。なお、Crubellier (2016, 135) は始動因と結びつく因果同名の解明に重点を置く点で本稿に近いが、 $\Lambda 3$ の最終的な主題はやはり形相にあると考えている。

Judson は、 $\Lambda 4-5$ とは違って、 $\Lambda 2-3$ でアリストテレスは最初から（感覚的）実体の原理を探究していると考える（2019, 80; 102; 109）。私は、アリストテレスがここですでに「存在するもの全て」を前面に出しており、実体はあくまでその中心的な例として扱われているに過ぎないと理解したい。まず $\Lambda 2$ で「実体」が登場するのは、実は冒頭の一箇所のみである（1069b3）¹⁹。関連する “τὸ τί” や “τόδε” が後ほど用いられるが（b9; 11）、それはアリストテレスが、互いに反対にあるものからの移行という一般的な仕方に変化を規定し、変化の基にある質料の存在を確認した後、変化を四種類に分ける場面においてである。重要なのは、ここで述べられているのが、実体の原理との関連で我々が想定するような実体の生成消滅だけでなく、場所移動や性質変化などを含む感覚的対象における変化全般だという点である。その後に出される例も青白さや成長などであり、 $\Lambda 2$ の最後のまとめに至るまで、実体の原理をまさに探究しているという理解は、それをはじめから前提しない限りさほど明瞭に認めうるものではない。

ここまでの確認を基に「実体の必要十分な原理が探究されている」という想定をいったん取り外したとき、そこに残るのは（実体を中心的な事例とするが、あくまで）「原因」概念そのものを巡る議論の展開として $\Lambda 2-3$ を見る観点である。この観点にとってまず重要なのは、 $\Lambda 2$ のまとめにおいてアリストテレスが特別な留保なしに、「三つの原因と三つの原理がある」という表現で形相（またはロゴス）、欠如態、質料を原因として提示していることである。直後の $\Lambda 3$ で導入される始動因を欠くこのまとめは、『自然学』第 2 巻のようにはじめから原因の全体像を有している視点からの体系的説明としては理解が難しく、 Λ 前半部の展開が、その都度の結論を中間報告しながら段々と論点を付け加えていくことで前進する、モデルの段階的修正という構造を有している可能性を示唆している。

続く $\Lambda 3$ の冒頭は、「これら〔 $\Lambda 2$ で論じられた事柄〕の後に次の点を〔述べる〕」（μετὰ ταῦτα ὅτι）という珍しい表現で始まる。 $\Lambda 2$ を何らかの仕方引き受けるこの表現の後に来るのは、生成変化の場面において直近の質料と形相は生成しない、という（Z7-9 などにも見られる）指摘である。続いてアリストテレスは、この指摘を説明するものとして、「全てのものにおいて、何かは何かによって何かへと変化する」（1069b36-1070a1）という点を挙げる。このやり取りは極めて圧縮されているが、ここでは次のように補ってパラフレーズしたい。

$\Lambda 2$ のモデルを生成変化の十分条件とするならば、形相と（形相が欠如している）質料があれば直ちに生成変化が生じることになる。その場合、特定の時点に生成変化が

¹⁹ この箇所は、*Metaph.* を章で分ける最初の試み（おそらく 16 世紀のもの）においては、 $\Lambda 1$ の末尾に置かれてきた（Alexandru 2014, 75n29）。Judson も翻訳ではこの試みに従っているが、注釈では内容的に $\Lambda 2$ とつなげて論じると明記している（2019, 23; 49）。近世の章分けに権威はないが、少なくとも 1 名のアリストテレス学者が $\Lambda 2$ に「実体」という語を入れない選択をしたということは、 $\Lambda 2$ の主題が見た目ほど分かりやすいものではないことを示していると思われる。

生じるためには、その質料と形相が、まさにその生成変化の時点に生じることが必要となる。しかし、この考えは無限後退に陥る。よって、質料と形相はその場で生成するのではなく、両者は生成変化の十分条件でもないと考えべきである。すると、特定の時点にその生成変化が生じたことを別の仕方でも説明するために、新たに始動因が必要となる。結果的に、(ある生成変化の時点で生成したのではない) 質料が (同じく生成していない) 形相へと、始動因によって (その特定の時点で) 生成変化する、ということになる。

このように理解すれば、 $\Lambda 3$, 1069b35–1070a4 は、 $\Lambda 2$ のモデルに生じうる問題を検討しながら、始動因を導入することでそれを補うものとして最終的に位置づけることができる²⁰。

V. 始動因を位置づける：モデルの明瞭化

続いてアリストテレスは、「これらの後に次の点を」という表現を再度用いた後、「それぞれの実体は同名のものから生成する」($\Lambda 3$, 1070a4–5) と述べる。私はこの指摘を、先に補完したモデルの内実を明瞭化するためのものとする²¹。つまりアリストテレスは、まさに新しく導入された始動因の正体を見定めるために、その役割を担う「同名のもの」から実体が生成するという点を指摘したうえで、同名のものとの身分を確定しようとしている。

なお、ここでは実体の生成が明白に述べられているので、 $\Lambda 2$ とは違って $\Lambda 3$ は実体の原理をまさに論じていると思われるかもしれない。しかし重要なのは、ここでの実体に対する言及が、 $\Lambda 3$ 冒頭で「全てのもの」(1069b36) に対する始動因をそれとなく導入した後になされているという点である。これを基に私は、ここから $\Lambda 3$ の末尾まで一貫して課題となるのは、新たに導入された始動因を形相や結合体との関連からどう位置づけるかであり、実体における因果同名は、まさにこれを考えるための中心的な事例となるから注目

²⁰ 直近の質料と形相の生成を否定することに関しては、ほぼ同じ主張が Z8 にもある。ただし、 $\Lambda 3$ ではこの主張から諸原因の同定へと記述が進むのに対して、Z8 では順番が逆であり、すでに始動因が導入された状態で質料と形相の生成の否定が論じられる。このことから、 $\Lambda 3$ の質料と形相の生成の否定は、Z8 冒頭での記述を思い出させる (従って、 $\Lambda 2$ のモデルの不足を自覚させる) 役割を担うものとも考えることもできる。なお、私が本文のパラフレーズで補った、始動因が必要となるそもそもの理由を Z8 から明確に取り出すことはできないが、 $\Lambda 3$, 984a19–25 での、質料があったとしても生成変化を実際に引き起こす原因がさらに必要である、という発言を基にこれを類推することができる ($\Lambda 6$, 1071b28–31; $\Lambda 10$, 1075b17–21 も参照)。ちなみに、 $\Lambda 3$, 1070a2 の $\sigma\delta\nu$ 以下 a4 までの部分は、主たる応答が終わった後に議論を補うための追記として取る。

²¹ よって、これを $\Lambda 3$, 1069b35–1070a4 での指摘から切り離す Judson (2019, 113) には同意しない。

されていると理解する²²。

ある実体が同名のものによって生成するといえるのは、自然物や人工物において、「人間」が「人間」を生み、建築者の魂の中にある技術としての「家」が個物としての「家」を生むからである。しかし、これらにおいて、「生む」の主語となる「人間」や「家」の身分はまだ明確ではない。続く $\Lambda 3$ の記述は、突如 ($\Lambda 1$ とは異なる) 新たな実体の区別を「形相・質料・結合体」として導入し (1070a9)、それらが例えば「(ある) これ」かどうかを判定する内容になっており、一見する限りでは「同名のもの」との関連が分かりづらい。私は「(ある) これ」と呼びうるか否かを、同名であるか否かを判定するための条件と捉え²³、この部分の記述を、「同名のもの」の身分を明らかにするためのものと考え²⁴。質料は条件付きでのみ「あるこれ」と呼ばれるので真正な候補から外れるが、形相は真正な意味で「あるこれ」と呼ばれる²⁵。問題は質料と形相の両者からなる結合体だが、これについてアリストテレスはまず、技術のような例外的な場合以外は「これ」(形相) が結合体から離れることはないと述べ、結合体も「同名のもの」の候補として残す²⁶。ただし、「これ」が結合体から離れうるかに関してはさらなる留保を付け、自然的なもののアイデアとしては、技術のような仕方でも形相が離れうる余地を(消極的に)認める。

新たな実体の区別に基づく以上の議論を踏まえ、アリストテレスは、同名の始動因になりうる「(ある) これ」について、それは「一方では〔結果より〕先に生成した〔結合体〕だという点で始動因であり、他方では〔結果と〕同時にあるロゴスのような仕方で始動因である」($\Lambda 3$, 1070a21-2) とする整理を行う²⁷。前者は個物としての人間が人間を生むときの親の在り方を、後者は医者の中の医術が健康を生むときの医術の在り方を示していると思われるが、結果的にアリストテレスは、新たに分けた実体のうち、結合体と(技術のような)形相に対して、始動因でありうる可能性を積極的に認めたことになる。

続いてアリストテレスは、結合体が消滅した後にも残りうるものはあるかという問題を

²² Crubellier (2016, 124) は、ここで実体が注目される理由を「因果同名は実体以外には適用されないから」とする解釈と、「単に $\Lambda 1$ で実体を論じると述べ範囲を制限したから」とする解釈をともに検討したうえで、中間といえる「実体は因果同名の典型的な事例となるから」とする解釈を採用する。なお $\Lambda 4$ では、 $\Lambda 3$ と同じ「質料・形相・始動因」からなるモデルを、実体ではない「関係的なもの」にも同じく適用できるか否かが最初の問題となっている。

²³ 「(ある) これ」という表現は個体を指すためにも使われるが、ここでは(同名と判定できる)特定の種を示すものと考え(Burnyeat 2001, 49n99; Judson 2019, 106-7 も参照)。

²⁴ 「同名のものから」という曖昧な表現を意図的なものと見なし、「(ある) これ」をその内実の解明と関連付ける解釈は、Crubellier (2016, 124; 127) による (Baghdassarian 2019, 142n2 も参照)。なお、私の解釈とは異なり、Crubellier は形相のみに始動因の役割を認めるが、 $\Lambda 3$, 1070a28 を見よ。

²⁵ 原文では「自然」のみが挙げられているが、これは形相の代表例を述べたものと考え。

²⁶ Z 8, 1033b10 では、「これ」という表現が結合体にもはっきり適用されている。

²⁷ 原文は “τὰ μὲν οὖν κινούντα αἴτια ὡς προγεγεννημένα ὄντα, τὰ δ’ ὡς ὁ λόγος ἄμα” で、Judson の英訳は “The causes which initiate changes <are causes> inasmuch as they have come to be previously, while the things which are causes in the sense of formula exist simultaneously” (2019, 25) である。拙訳はこれとかなり異なるが、確認できた殆どの翻訳は Judson に近い。

取り上げる（Λ3, 1070a24–6）。これは、先の整理で述べた始動因の二つの在り方に追加すべきものがあるかを検討する作業として理解できるが、具体的な結論を下すことは差し控えられている。最後に彼は、Λ3 で今まで述べられたことから、始動因と関連してアイデアのようなものを積極的に持ち出す必要はないと主張する。人間が人間を生むことは結合体で説明できるし、医術は健康のロゴスとして理解できるからである（1070a26–30）。

結果としてΛ3, 1070a9–30 は、アイデアを導入する必要があるかという点に気を配りながら、始動因でありうる同名の「（ある）これ」を形相と結合体との関連から整理することで、原因論を推し進める箇所として理解できる。続くΛ4–5 は、諸原因の相互関係をΛ3 からさらに拡張して捉えることを目指すものであり、その目標地点は、原因がある意味ではそれぞれのものにとって異なるが、別の（普遍的またはアナロジー的な）意味では全てのものにとって同じだという、「全てのもの」に関わる包括的な原因の相互関係の把握として指定される。

ここでその詳細を見届ける余裕はないが、Λ4 の出発点とΛ5 の終着点に関してのみ、それぞれ 1 点ずつ注記しておきたい。「全てのもの」に関わる包括的な原因の相互関係を把握するための議論がΛ4 で始まる時、そこでもまず提起されるのは、Λ2–3 で得られたモデルに対して生じる問い——「形相・質料・始動因」という枠組みだけで、Λ3 で論じた実体の場合とまだ論じられていない「関係的なもの」の場合を同じように説明できるか——である。こうした議論はΛ5 でも引き続き検討されるが、最終的には、「感覚的なものの原理は何であり、いくつあり、どのようにして同じでどのようにして異なるのか」が語られた（1071b1–2）という記述をもってΛ前半部は終わりを告げる。私はこのΛ5 末尾の記述も、Λ2 末尾のまとめ以上の意味をもたないと考えたい。この宣言は、感覚的なものの原理に関して現時点で述べる事柄であり、Λ6 以降での探究の結果によっては、修正される可能性を多分に残している²⁸。

続くΛ6 では、実体が（Λ1 で示された意味で）三種類だったことが再度確認されたうえで、不動の永遠的な実体が必然的に存在しなければならない理由が求められる。それはこの特殊な実体が、第一のものである実体に依存する運動や時間の消滅が不可能であることの原因だからあり、この不動の実体は、単に永遠的であるだけでなく、他のものに働きかける能力を現実的に働かせていることをその本質とする実体であるとされる。さらにΛ7 では、ある意味では始動因だが特定の時点に働きかけるものではない不動の実体の在り方を巡って、「欲求の対象や知性の対象」及び「愛されるもの」といった目的論的な語彙を基に議論が進んでゆく²⁹。

²⁸ あるいは、感覚的なものの原理の探究はΛ5 で完結したと捉え、Λ後半部で不動の実体との関連で目的因を導入し、前・後半部を合わせて「存在するもの全ての原理の探究」が完成すると見なすこともできる。その場合、Λのアリストテレスは、月下の世界で直接働くような目的因は認めていないことになるだろう。なお、この理解を取った場合も、Λ全体の目的が四原因全ての網羅であることは変わらない。

²⁹ Λで目的因が導入されることに関して、それが正確にどの箇所でなされているかについて

VI. 結び

本稿の主な論点を整理しよう。私は、 Λ を巡る近年の解釈方針のいくつかを受け入れる旨を述べたうえで、 $\Lambda 1$ 冒頭の価値には留保を付け、 Λ を、一応の主題はあるがその詳細はまだ確定していないような、素案としても未完成的な草稿として見る可能性を残した。続いて私は、「モデルの段階的修正を通した（目的因を含む）四原因論の展開」として Λ 全体の主題を読み解くという見通しを立てたうえで、試験的に、始動因を導入し位置づけるための章として $\Lambda 3$ を解釈した。

このような見通しをどこまで推し進めることができるかは今後の課題だが、ここでは最後に、 Λ 前半部を重視する方針が根本的にもつ危うさに言及しておきたい。 Λ 後半部のインパクトに呑み込まれず前半部と正面から向き合おうとする解釈は、事実として両者をもつ質的な違いにより、 Λ 全体の完成度という観点から見れば諸刃の剣である。というのも、 Λ は単に内容的に難解であるだけでなく、そもそもの試みとして不整合なのではないかという問題をも引き受ける必要が、いつにも増して生じてくるからである。

しかしこの「完成度」は、 Λ というテキストが用いられた場面（今となっては解明不可能だが³⁰）をどう設定するかに応じて意味合いが変わってくると思われる。 Λ は、現代の職業哲学者が学術雑誌の査読論文を執筆する際に用いるアウトラインとしては著しく未完成である。しかし、勤勉だが様々な制約の下にある教師が作った丁寧なハンドアウトとしては、むしろ優れているともいえる。つまり、原理や原因の在り方を教室でともに考えるための出発点としては、十分な材料と潤沢な余白を備えていると思われるのである。このような想定の下でなら、 Λ に対して唯一の読み筋を確定しようとする試みは、むしろ当初の目的から外れることになるのかもしれない——結局のところ、 Λ 前半部の運命は、整合性はどのようなテキストにとってどこまで美德なのかという、極めて大きな問題とも関わっているようである。

引用文献

Alexandru, Stefan. 2014. *Aristotle's "Metaphysics" Lambda: Annotated critical edition based upon a systematic investigation of Greek, Latin, Arabic and Hebrew sources*. Philosophia Antiqua. Leiden: Brill.

は多様な解釈があるが（Crubellier 2000, 157; Berti 2016, 84; Judson 2019, 119–21）、それがなされていること自体についてはほぼ異論がない（ただし Charles 2012, 246–53 は反対）。なお、目的因と始動因の関係を第一の動者との関連から整理することにアリストテレスが成功したかについては、悲観的な見解が出されている（Miller 2013）。

³⁰ 死を目前にしたアリストテレスを想像する Burnyeat (2001, 147–9) のミュートスがあるが、当然ながら定説にはなっていない（Frede 2000a, 48–9; Judson 2019, 3）。

- Baghdassarian, Fabienne. 2019. *Métaphysique Lambda*. Bibliothèque des textes philosophiques. Paris: Vrin.
- Barnes, Jonathan. 1995. Metaphysics. In *The Cambridge companion to Aristotle*. Ed. Jonathan Barnes. Cambridge Companions to Philosophy, 66–108. Cambridge: Cambridge University Press.
- Berti, Enrico. 2016. The program of *Metaphysics* Lambda (Chapter 1). In Horn (2016, 67–86).
- Blass, Friedrich. 1875. Aristotelisches. *Rheinisches Museum für Philologie*, neue Folge 30: 481–505.
- Burnyeat, Myles. 2001. *A map of “Metaphysics” Zeta*. Pittsburgh, Pennsylvania: Mathesis.
- Charles, David. 2012. Teleological causation. In *The Oxford handbook of Aristotle*. Ed. Christopher Shields. Oxford Handbooks in Philosophy, 227–66. Oxford: Oxford University Press.
- Crubellier, Michel. 2000. *Metaphysics* Λ 4. In Frede and Charles (2000, 137–60).
- 2016. What the form has to be and what it needs not be (*Metaphysics*, Λ 3). In Horn (2016, 118–37).
- Fazzo, Silvia. 2012. *Il libro Lambda della “Metafisica” di Aristotele*. Elenchos. Napoli: Bibliopolis.
- 2014. *Commento al libro Lambda della “Metafisica” di Aristotele*. Elenchos. Napoli: Bibliopolis.
- Frede, Michael. 2000a. Introduction. In Frede and Charles (2000, 1–52).
- 2000b. *Metaphysics* Λ 1. In Frede and Charles (2000, 53–80).
- Frede, Michael and David Charles. 2000. *Aristotle’s “Metaphysics” Lambda*. Symposium Aristotelicum. Oxford: Clarendon Press.
- Horn, Christoph. 2016. *Aristotle’s “Metaphysics” Lambda: New essays*. Philosophie der Antike. Berlin: Gruyter.
- Judson, Lindsay. 2018. First philosophy in *Metaphysics* Λ. *Oxford Studies in Ancient Philosophy* 54: 227–77.
- 2019. *Metaphysics: Book Lambda*. Clarendon Aristotle Series. Oxford: Oxford University Press.
- Lang, Helen S. 1993. The structure and subject of *Metaphysics* Λ. *Phronesis* 38, no.3: 257–80.
- Menn, Stephen. Forthcoming. *The aim and the argument of Aristotle’s “Metaphysics.”* Accessed December 20, 2022. <https://www.philosophie.hu-berlin.de/de/lehrbereiche/antike/mitarbeiter/menn/contents>
- Miller, Fred D., Jr. 2013. Aristotle’s divine cause. In *Aristotle on method and metaphysics*. Ed. Edward Feser. Philosophers in Depth, 277–98. Houndmills, Basingstoke: Palgrave Macmillan.
- Γκολίτσης, Παντελής. 2021. *Μετά τα φυσικά, Λάμβδα: Η αριστοτελική θεολογία*. Ηράκλειο Κρήτης: Πανεπιστημιακές Εκδόσεις Κρήτης.
- 中畑正志 (2020) 「アリストテレス『形而上学』を新たに読むために」『西洋古典学研究』68、101-14 頁.
- 文景楠 (2022) 「アイティアーのもつれ」『哲學』第 73 号、363–74 頁.

後記

セミナーでは、 $\Lambda 1$ の役割や $\Lambda 3$ のテキスト解釈、 Λ 後半部における目的因の重要性、そして、 Λ 全体を視野に入れた「要素」の位置づけなどに関して、自力では思いつかなかった極めて有意義なご質問を多数頂いた。そのうち本稿を準備する時点に対応することができたのは、 Λ 全体の構成に対する私の解釈を示すために本稿第 3 節で主に用いた表現の修正である。誤解を招く可能性があった「四原因論の問答法的展開」という当初の表現の代わりに、本稿では「モデルの段階的修正を通じた四原因論の展開」を用いた。当日会場にて司会の労を執ってくださった河谷淳氏と、発表の場の内外で貴重なご示唆をくださった様々な方々に感謝の言葉を申し上げます。